明治四十二年一月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子

是汝に我等召されてキリストの使者となれり。我等キリストに代りて汝等が神に和がんことを爾曹に希ふ。　哥林多後書五、二十

明治の女子　第六卷 第一號　白羊宮

祈禱會兼題
日記より　孤燈生
談話二三　木下尙江
歸鄕の道草　兵働秋郞
論語抄解（一）　井筧節三
小倉百人一首解釋　辻村婧子
ああ、我家の燕（長詩）　猪野隼夫
麹町の秋　塚田たか子
罪（小說）　師岡聖
白菊　高宮安夫
古文新香（一）　嵯峨菫子
新書管見（一）　讀書生

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

一、「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。

一、「明治の女子」は一年分郵稅共金五拾錢一部郵稅共金五錢とす。

一、日本基督教女子青年會は青年女子の衞生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。

一、日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長　エム、エ、ホイツトマン

副委員長　岡見惠子

記錄書記　エ、ジー、ルイス

會計　フィシャー

萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子

萬國學生基督教同盟會委員　宮川すみ子

東京在住委員

津田梅子　渡部瀧子

エ、ピー、ウエスト　井上友子

平野濱子　鈴木歌子

中島小春　井深花子

地方在住委員

大坂　ケー、ツリスツラム　京都　松田道子

京都　ジ、エス、フエルプス　仙臺　エル、ザフルー

名古屋　イ、エム、ソーパル　廣島　エヌ、ジー、ゲインス

日本女子基督教青年會幹事　エー、シー、マクドナルド

同副幹事　エス、シー、フキツシヤー

日本基督教女子青年會の事に付き御尋ねの節は東京麴町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

明治の女子第六卷第一號

明治四十二年一月十三日印刷

明治四十二年一月十五日發行

東京市麴町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人　エー、シー、マクドナルド

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

謹みて榮えある希望の新年を祝し、併せて會員諸姉の身も靈も、いやが上に健やかならんことを祈り奉る。

明治四十二年一月一日

日本基督敎女子青年會

謹みて、めでたき新年を祝し、新しき年に於ける、會員諸姉の、いや增す御幸福を祈りまつる。

明治四十二年一月一日

明治の女子編輯同人

拜啓、櫻齋川副兄舊臘一年志願兵として佐賀の兵營に入營せられ候につき、爾今丹羽先生御監督の下に小生不才を以て敢えて本誌編輯の重任に當ること丶相成申し候。抑も本誌は堂々たる日本基督敎女子青年會の機關雜誌にして、同會の使命の重大なるが如く本誌の任務亦從つて重く且つ遠しと謂ふべし。豈に小生猥が不才を以て之を汙すに忍びん。櫻齋兄蒼惶として入營せられ、小生亦平生の情誼に依り輕々に之の大任を受く。今に至つて且悔ひ且躊ひ且恐れ且危ぶむのみ。幸にして平生敬慕措かざる丹羽先生嘗さに編輯監督の勞を賜はる。小生は即ち鞠躬如として偏に犬馬の勞を捧ぐるのみ。思ふに會員諸姉亦た小生が志を諒とし、常に寛恕と指敎とを吝み給はざるべし。わが「明治の女子」よ、いやが上に氣高くふくよかに生ひ立てかし。右新任の御挨拶申上候。頓首。

明治四十二年一月

井篦節三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治之女子　第六卷 第壹號

白羊宮

（明治四十二年一月十五日發行）

祈禱會兼題

北米合衆國基督教女子靑年會同盟會發行「同盟月報」千九百〇八年十一月號に依る。（エ、シ、マクドナルド）

第一　耶蘇基督に於ける五集會。

（一）人　ピリピ書第二章五―十一。ヘブライ書第四章十五。
（二）師　ヨハネ傳第七章十五―十七。同章四十―四六。
（三）友　ヨハネ傳第十五章十三―十五。ルカ傳第七章三四。
（四）主　默示錄第七章九―十七。コロサイ書第二章六―十四。
（六）僕　ヨハネ傳第十三章三―十七。マタイ傳第十章二五。

第二　無益なる交友の危險。

基督は「罪人より離れて」居たまへり（ヘブライ書第七章二六）。而も尙「罪人の友」たるを失ひ給はず（ルカ傳第七章三七。コリント後書第六章十四―十八）。

第三　我より與ふる事をせずして、獨り他より受くる事を以て滿足するの危險。（ロマ書第十三章八。コリント前書第九章十四―十六）

第四　基督敎的戰鬪。其の敵、武器、味方。（エペソ書第六章十―十七。ロマ書第八章廿六。）

第五　每朝の勸行。その意義、價値、效果。（ピリピ書第三章八。使徒行傳第四章十三。マカ傳第六章三十一。マカ傳第十六章廿八。同第一章卅五。同第十六章十五。）

第六　神の賜物。我等が捧物。（ヨハネ傳第一章十七。コリント後書第九章十五。ロマ書第十二章一。）

日記より

孤燈生

○

文明の進歩とは何の謂ぞや。人間の社會が男性的情態より女性的情態に推移するの謂なり。

汝の敵汝が左の頰を打たば、汝も亦彼が右の頰を打て、――所謂齒を以て齒を償ひ、眼を以て眼を償ふは男子の道德なり。汝の敵汝が右の頰を打たば、左の頰をも彼に打たせよ、――所謂我敵を愛するは、女子の道德なり。見るべし、文明の進歩とは人間の社會が男性的情態より女性的情態に推移するの謂なるを。

美人とは女性の謂なるが如く、文明國とは女性的國家の謂なり。

所謂蠻カラよ。所謂蠻勇保存論者よ。汝等は過渡時代に於ける、舊習の殿軍のみ、蠻風の末子のみ。見ずや、純潔賢良の女性こそは、正に人生の精華にして、眞、善、愛、美の標章なるを。(一月一日)

○

過ぐる大晦日、一友人と一米國人とに誘はれ、鎌倉なる鶴ヶ岡八幡宮に詣づ。粟を持つて招けば數十の神鳩群り、一羽我掌に留る。米人我に倣へども鳩肯せず。友人戲れて曰く、君は外人なれば、神鳩の肯せざるは宜なり、と。

彼の日、米人東京に歸る。今日、友人と二人また八幡に詣づ。端なくも思へらく、二十世紀の今日猶國土の異同に依つて親疎輕重の區別を徹せざる者、豈啻我が無知の鳩のみならんや。(一月二日)

○

今日の『國民新聞』に山路愛山先生の一文あり。其大意に曰く、吾、弱冠にして韓非子を讀みて解する能はず、中年にして再び韓非子を讀みて又解する能はず、此頃三たび韓非子を讀んで初めて釋然として之を解するを得たり。げにや、孔孟は理想家のみ、理想家は空想家のみ、空想は活ける人生に實用なきなり。夫れ歷史は繰返す、我等が歷史は所謂理想家が失敗の繰返に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はあらずや、と。

夫れ然り、豈夫れ然らんや。孔孟の理想も漸次に實行せられ、孔孟以上の理想すらも漸次に實行せられ、奇拔不可思議の空想すらも漸次に實行せられんとす。是れ我等が歴史の語る所、夫れ歴史は繰返す、されど全く同一事を繰返すにはあらず。過去の人生は理想的人生の未成品のみ。之を標準として人生の全部を判斷するは誤れり。（一月三日）

○

昨夜は吉例により、一富士、二鷹、三茄子、三國一の目出度き初夢を結ばむものと、大いに身構へして臥しけるに、餘りに身構へや過ぎたりけん、前後も知らず熟眠して半夢だも結ばず、或は結びたるやも知れざれど、當の余に於て更に覺なければ他に詮議の術もなし。

因つて思ふに、夢は元來五感の疲勞のみ。吉かれ凶しかれ、既に夢を結ぶは即ち五感靈肉に故障不安の在つて存する證據なり。もし夫れ半夢だも結ばざるに至つては五感靈肉に故障不安の在つて存せざる所以、宜也、聖人に夢なしといふこと。抑も吉き夢を結んで喜び、惡しき夢を結んで憂ふるは是れ人間の常情のみ。半夢をだも結ばずして空々寞如たるに至つては正に人間を超越して聖人に近からずや。以て自ら慰む。

初夢や、見ざりしか、はた忘れけん。（一月三日）

○

去月廿八日なりけん、某の米國人等と逗子に散歩す人家迎年の準備に忙はし、米人注連飾を見て曰く、之は何の縁起ぞや。是に於てか、知らぬといふことを知らざる吾、一時は答辯に窮せりと雖も長くは窮せず、即ち附會して曰く、上古我邦の家屋は凡べて藁繩を以て結べり。注連繩は蓋し其の遺風ならんのみ、と。

今日一友と餅に就いて語る、友人の曰く、餅を神饌となすは、蓋し餅が上古唯一の兵糧なりければなり、と。

友人の附會は余が附會に似て、而も稍々正しきに近きが如し。（一月四日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○

凡べての罪を己れに歸せよ。世の罪を多く己に歸する程人は益偉大なるなり。

代議士の腐敗を罵る勿れ。學生の墮落を謗る勿れ。宗敎家の無能を責むる勿れ。爾く漠然たる無責任なる批評は決して世道人心を利益することなし。眞に世道人心を利益せんとならば、宜しく、腐敗せる代議士の罪狀を調査して法廷に訴へよ。宜しく墮落せる學生を拉して善良の感化を與へよ。宜しく無能の宗敎家をして敎壇に立つの必要なからしめよ。若し之をしもなすなきは、蓋し、我眞に世道人心を利益するの誠意を缺くの證なり。世道人心の不振、我罪にあらずして何ぞや。（一月四日）

○

冬季休暇を以て九州の故郷に歸れる親友の送れる手紙に、拜啓、謹んで新年を賀し、併せて年來の御厚情を謝し候。寄宿舍の前途の爲に貴兄の御健在を祈る。小生事、去る二十六日無事皈京仕り途中京都と明石の浦とに泊り、思ふ存分空想に耽り、此愚かなる生を葬らんとせしかども果さず、今も尙夢のやうな生活をいたし居り申し候。

明石の浦を出で丶汽車に投せし時、愛らしき少女の編物に餘念なきを見て、曾て解けざりし問題が溶解して嬉しく候ひき。其れは、一詩人が小さき苔を掌上に弄びながら歌へる、

大いなる苔よ、大なる宇宙ををさめ得て餘あり。

といふ句にて、少女が世界の、編物に充實せるを見て小さき苔に大なる宇宙の影やどるといふ大觀を得申し候ふ。嬉しき事限なく、此日クリスマスにて「あなうれし」といふ讃美歌を心潛かに唱へ申候。先は、皆様によろしく、頓首。（一月五日）

○

話は巧みに語りたきものなり。佳き話、面白き話の拙なく語られたるは、隨分聞き苦しく、かたはらいたきものなり。（一月六日）

○

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

先輩者流の物質主義は唯卑しむべく笑ふべきのみ。青年子女の物質主義に至つては、眞に憎むべく、憐れむべく、怒るべく、悲しむべく、嘆ずべく、惜しむべし。(一月七日)

○

久方の光いとも長閑けき、春の眞晝、うい〳〵しくみづ〳〵しき、芝生の若緑に仰ぎ臥して、麗らかに晴れたる蒼空を眺め入りたるばかり、わが少き時より、心地よきはあらざりき。青春の瞑想の途の端は、いつしか紫の夢に入りつ。蝶なんどの顔にやとまりけん、ふと眼醒めては、四邊を打眺めて訝りぬ。夢の中に吾は大地溶け入りて、今は蓮華艸の一莖に咲き出でつるにはあらずや、など。

寔に、我に詩を教へしものは一莖の蓮華艸なりけり寔に、我に神を教へしものは一鏡の蒼空なりけり。

米國理學博士田村哲氏の談に依れば、廣き世界の中晴空の最も美しきは伊太利と我日本なりとぞ。嬉しからずや、我等をして心ゆくばかり晴空の福音を叫び蒼天の詩をうたはしめよ。(一月七日)

○

器物などを太切にするは良きことなり。生なきものをも生あるが如く取扱ひて、もつとも大切にすべし。されど物を吝むべからず、吝む事は絶對的に不可也。まさかの時に聊も物を吝まず我慾に執着せざらん爲にこそ、我等は平生努めて物を約にし大切にする必要もあるなれ。夫れ「人惡に誘はるゝは己の慾に引かされて誘はるゝなり」(約各書第一章第十四節。)與ふべきものば潔く與へよ。そは神之を命じ給へば也。神は我等に必要のものを與へ給ふ。否、貸し給ふ也。さらば吾等何物をか敢えて吝むべき。(一月七日)

○

金錢を如何に費さん。我か爲に費すべからず、神のため、人のために費すべし。但、如何せば眞に神の爲め、人の爲めに金錢を費し得べきか。これ我等か知識と經驗と修養とを要する所以なり。(一月七日)

談話一二三

木下尚江

○

人間は人の多く行く道をのみ辿るべきものに非ず。ては甚だ平坦にして何等の苦なく痛なしと雖、そこに又た何等の得べき所なし、荊棘生ひ茂れる山谷と雖、人のつゆ知らざる眞理は宿せり。世に博士教授などいへる人々の書を見るに、たゞに觀察の該博なるのみにして、其内容を探るに殆んど絶無なり。かくては空論にのみ止りて何等稗益する所なし。そも〳〵讀書によりて知識を得んことを求むるは不可なり。かくの如き傾向は人を毒するもの也。百萬の書を讀むといへども其れによりて得たる知識は右往左往にさまよひて、何等の活用なく、何等の利用なし、吾人は吾人の衷に一のあるもの（或は信仰と稱するも可ならんか、即ち吾人が確信する信念なり）を得て、而して初めて之までの讀書によりて得たる知識を活用せざるべからず。

○

現今帝國大學出身の輩を見るに、殆んど採るに足るべきものなし。宗教の専門研究者として名ある某々博士等の論議を見るも、系統的に秩序的なるのみにして眞に見るべきものは更になし。恰かも身は沖にありて足は地に墜ちざるものゝ如し。

○

吾人は奇抜ならざるべからず。吾人は大膽ならざるべからず。他人の批評に顧慮して云はんと欲する所を云ひ得ざるがあり。今の批評家なるものは殆んど皆駄目なり。吾人は吾人の思ふ存分を直截に云はんのみ。敢えて恐る所なし。敵なきものは進歩なし。吾人の思想は常に變化しつゝあり。今後も斷えず之あるべし。而も變化は即ち進歩なり。一變化ある毎に吾人は其の都度一進歩を認む。世に敵なくしてあらゆる方面より賞讃せらるゝものあり。かくの如き人は非常なる天才なるか、然らざれば各方面に適する樣に身を處するの輩にして、かゝる人は寧ろ傲慢なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○

人生、順境にある者は進歩なく、逆境にある者にして初めて多くの進歩あり。余、十年の前曾て牢獄の人となれりき。その時思へらく、博士學者と稱する者を茲に送りて暫く沈思せしむる、亦甚だ可ならんかと。

○

余は凡べて獨斷的なり。今に至るまで殆んど獨學なり。されば學問の進歩せる當今の青年にして一時間の講義に會得せる事も、余は二年三年を費しゝ事も少からず。而も自ら得たる所のものは其の根據甚だ強固なり。實驗によりて自ら學び得たる所のものは、學者敎授の知らざる、剩へ彼等の夢想だもせざる所の眞理を獲得せしむること往々にして之あり。綱島梁川君の信仰は讀書によりて得たるに非ず、肺病によりて得たるなり、死によりて得たるなり。

○

余熟ら思ふに、吾等の從事し來りし傳道なるものは單に自己の主義、思想、信仰の發表にして、何等の效果なかりしやうなり。傳道の本義は信者の持てる力を導きて彼岸に達せしむるにあり。

○

人生の到達すべき終局の點は必ずや存す、と思ふ。而も人によりて其の取るべき道を異にす。或者は人知れぬ山谷に分け入りて七曲九折漸くにして山頂に達し茲に至りて初めて自己の踏み來りし道の險惡なりし事さては遠曲なりし事を知り得べし。此道を辿らば甚だ容易なりしものをと思ふも、頂上に達せざれば中々に知るべからず、かくの如くにして、各々が自ら眞理と思ふ所に從ひて進み、遂に頂上に達し、自ら其眞理なる事を思ふに至らば、茲に於てか各自の有する眞理の中に、共通せる一條の線路を發見せん。即ちこれ自然の理法なり。宇宙の眞理なり。然れども一片の百合の花と雖ども、造花の深き心を舍せり。山頂に達せずと雖、谷間に百合の花瓣は開けり。之によりて吾人は充分の安慰を得べく、充分の滿足を得べし。

○

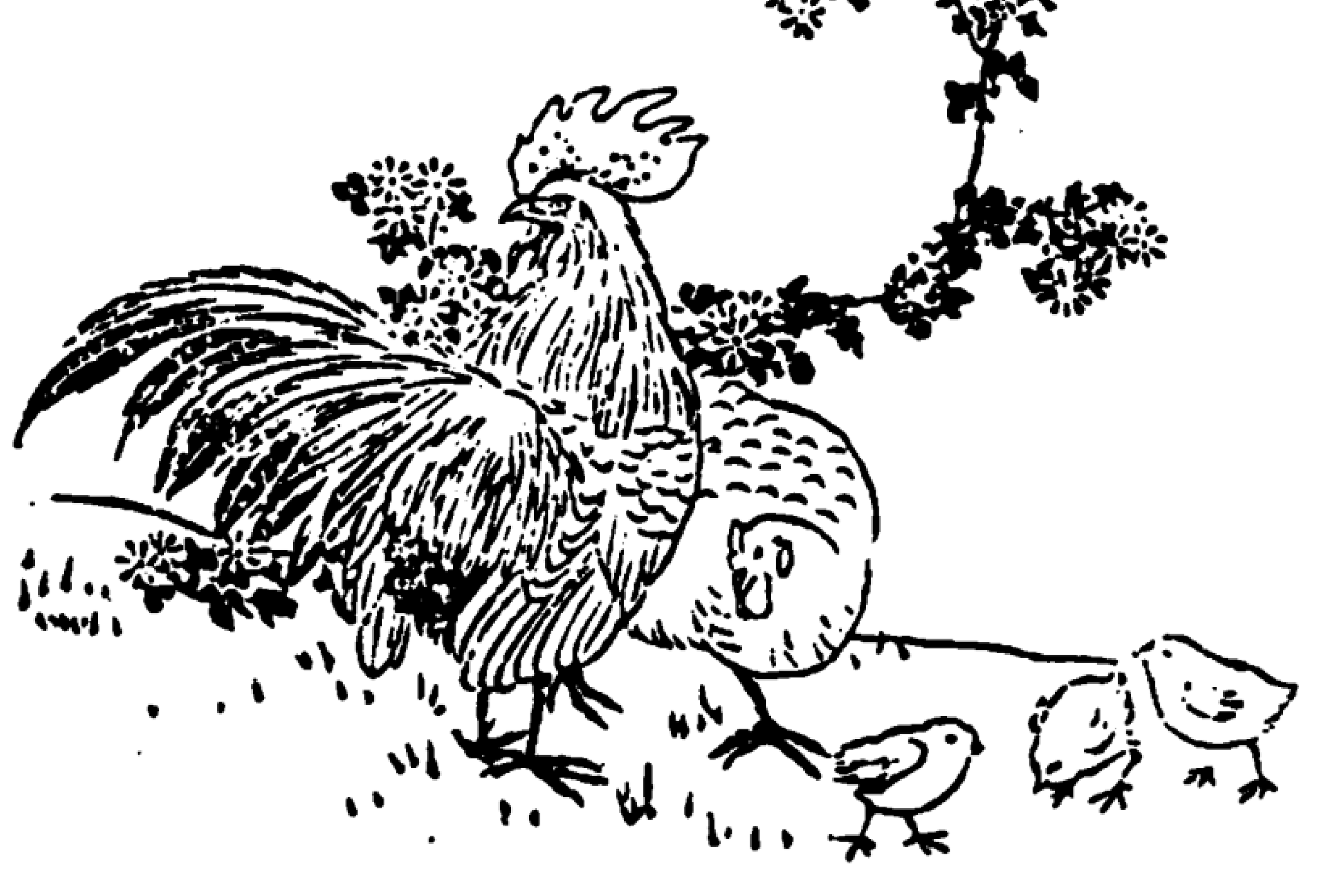
人は必ずや一と度は煩悶の時期を經過せざるべからず。進歩なきものはいざ知らず、いやしくも進歩あるものは此時期なかるべからず。煩悶は其自身進歩也。余廿五歳に至るまでは如何なる書を讀むも、右に左に散じて一定せず。茲に於てか煩悶生ず。此の煩悶を經て初めて自覺の境にも達しぬ。

○

余嘗て聖書を讀みて、キリストの所謂愛なるものに滿足する能はず。「人爾が右の頰を打たば亦他の頰をも轉らして之れに向けよ」、「裏衣を取らんとする者には上服をも亦とらせよ」、と。甚だ男らしからざる也。されば自己の性格に適ひたる所をのみ讀みて他は之を捨てたり。然れども今にして之を思ふに、眞の愛は茲に在り。

キリストの福音は秩序なく系統なく、雜然として恰も未墾の土地の如し。かくの如く雜然たるものは一にキリストの多く敎育を受けざりしに由る。而も尚眞理は此中に存す。光明は此中に存す。

キリスト敎にありては生殖を以て罪惡となす。是れキリストの敎に於ける雜草なり。世に雜草といふも玉寶といふも凡べて之を信ずる者あり。又皮を剝ぎて中身のみを信ずる者あり。トルストイ翁の如きは即ち後者に屬す。我等は砂と金との混合物の中より金を選り出さんことを要す。(寺田孝助君の讀書に依る)



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歸鄉の道艸

兵働秋郎

歸る前に何だか搔痒の感に堪えざるものがある。空く還鄉と嘆じけん上人もあつたが、自分は誠に其の感じを持つて居る。故鄉とは名のみにて、自分には何の情味もない。さればとて足の向ふ所、心の走る所、あなたの胸が私の故鄉だと呼ぶやうな開放的な放浪生活者の自由をも持たぬ。自分は斯くして鈍刀の如く、切るべきものも切らず、此大地に何の刻みもなさず、消え去るのであらうか。

君はあんまりローマンチケルだ、と友はいふ。萬事が遊戲的循環的で、更に何等の進歩もない、印象も殘らない、と自分は實にしか感じて居る。眞に愚かなるものである。更に友はいふ。今の世は自覺の時代にて愚人もそれ相當に自覺をして居る、と。

循環的生活をやつてはならぬ、これより後といふ斷乎たる處置を要する、と柏井先生はいはれた。自分には其のライフの活躍がない。ライフだ、ライフだ。自分はこれより死の問題に對するが如く眞面目にライフを傾注しなければならぬ。決して死を以てやるといふことが悲觀的ではない。キリストの死、自分には今更ながら光を與ふるやうな氣がする。自分は其死の樣を思うて、誤解をとき荊蕀を開かねばなるまい。

廿二日午後三時半發にて歸國の途につく。腕車上にてノートを忘れたことを思ひついて、獨りで寄宿舍に驅け戻る。私にとつてはライフから二番目の大切なノートである。車夫と二個の重要な荷物とを置き去りにしたので、或は車夫が其れを持つて逃亡しては居ないかと掛念して歸つて見ると、車夫は忠實に待つて居て呉れた。停車場に着いて汽車に乘るとき遲て、仰向にグッタリと滑り倒れた。蹶起はしたものゝ、それは〳〵息詰る程の痛さであつた。今朝のうらなひに對して不忠實であつた事に思ひ合せた。

明くれは二十三日なり。六時未明に京都着。太陽が上ると共に西京を見物せんと待つけれども、容易に出

さうもないので、一星づく夜の薄明をとぼ〳〵と東山の方へたどる。時に黎明の鐘が鳴る。何處だと問へは東寺の鐘だといふ。此の鐘に送られて第一に行き當つたのが三十三間堂である。其側に一人のお婆あんが東を向いて切りに念佛を唱へて居る。近よつて三十三間堂の由來を尋ねて見ると、此の建物は皆柳で拵へたものて云々、と談話の間に念佛を唱へる。自分は一周して歸らんと別れたが、其後を見返れは、念佛の人は跛者である。前世の宿世や恐しかりけん。不斷の念佛、其聲に地から出たやうな響がして居た。

それから清水寺にゆく。清水寺の側に茶屋がある。轟餅といふ招牌が下がつて居る。食べて見やうと腰を掛くれば、「忠僕茶屋」と書いてある。お婆さんに其の由來を聞けば、忠僕とは此寺の住職なりし月照様の僕重助のことで、私の配偶だといふ。お婆さんは昆布茶をすゝめ、やがて轟餅を呉れて云ふには、此茶屋の名は太閤頼光さんと海江田信義さんとして名づけてくれて、朝日新聞の天囚居士が書いたのだ。轟餅とはもと此茶屋があの轟橋の傍にありし故にかく名づけたのだと。箸をつくればそんなに品のよい餅ではない。ガサ〳〵したあらくれ餅の、しかも實のある餅で、忠僕といふ聯想をうかばせるに足ると感じながら、先づは食べた。

それから自分は智恩院へとたどる。東大谷あたりの山のたゝずまひは誠に清明である。常盤木枝を御空にはりて緑の色よりも鮮かなる美しい靜かな所である。

それから四條京極あたりの賑はしい所をと思つて行く。自分は朝から歩いて居るけれども、まだ京美人といふ風のものにはちつとも行き當らない。京都の女は何處かに特色があらうと注意して居たが、自分の出會つた限りに於ては皆白痴顔である。顔にしまりがない。男もさうである。ちつともよいひらめきはない。東京の神經質の人は京都のひらめきを見せてくれとあせるだらう。しかし京都はそんな所ではない、飽くまでも優長な所であらう。地は落ちつき拂つて居る。決して東京のやうにでんぐりかへつては居らぬ。神經質

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の人、緊張して居る人は駄目だ、と云ひさうである。露伴さんは京都の文藝の揺籃地だ、と申されましたが、或はさうかも知れぬ。新流行に追はれ、歴史の眼をちつとも持つて居ないものは駄目だ、と云ひさうに、京都は古くより輝いて居る。底光りがして居るので、ある。

熱鬧の地より行くべきは、幽居の地、嵯峨の奥である。二條より汽車に乗り嵯峨に着く。此のわたり自然の風光何となく奥床しい心地がした。大井川に渡せる渡月橋のあなた、嵐山は始めて大なるひらめきを與へ、驚嘆の眼を以て打ち仰いた。其刹那、水白く、櫻白く、月も亦白かるべくやと思はれ、直に畫中の人となつた。渡目橋の傍に小督の舊跡がある。今はたゞ籬をめぐらせるのみ。「嵯峨の月如何に見て來と寮の馬、つかはされける去んぬる夕」、とは友の詩であるが、誠に當時が偲ばれる。其れより嵐山の奥に入り、大悲閣に登つて、金閣寺の枚折數葉を買つて歸る。松の雫はら〳〵と落ち、後は雨ともなつた。

この夜、三條の小橋に泊る。夕飯を終へて散歩の序に忠臣藏の芝居を見る。丁度祇園一力揚屋の段で、幕があく。平右衛門が其主大石良雄に東の供を許されて狂喜するに至る所を見て、自分は思はず涙がこぼれた。十一時に宿に歸り、翌朝十時頃より金閣寺に至る。風致誠に明媚、側なる茶屋に寄り鶯餅を食ふ。鶯の居さうな靜閑な所である。足利義満は此處に閑居の地を定めたのである。本堂より衣笠山をのぞむ所誠によく自然の美を利したり山岡鐵洲の額に「天下一品」、と嘆稱したものがあつた。わづらしき寶物を拝見して後、綠の琥珀色せる臼茶と、淡如たる茶菓を饗せられて、五百年の昔を思ひ返して、脱俗の感、幽懐の情、禁ずる能はざるものありき。

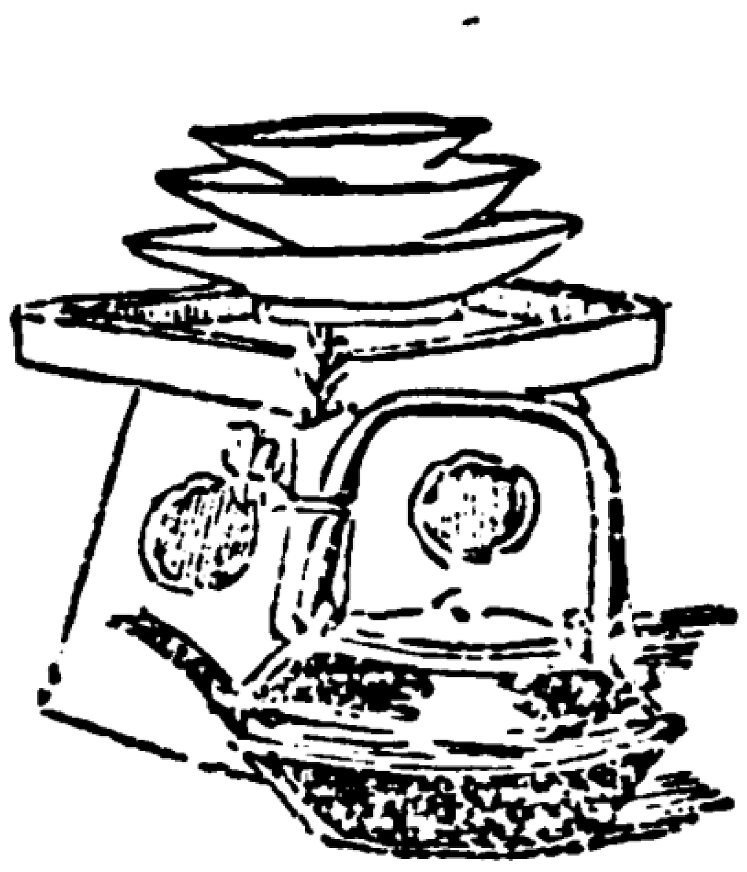
柏井先生より拝借したる「京城勝覽」といふ。貝原益軒のものにて、面白く京をめぐり歩いた。本の表におぼろかに、バイロンの詩を引いて樂書してある。自分は其意を解かうとして、今だに腑に落ちない。

Travel, in the younger son is a part of Education;

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

in the elder, a part of experience

二十四日午後三時半の汽車で下る。六時明石で下車半日此浦の景色にあこがれんとて。人丸山に登つて淡路島通ふ千鳥の聲をしのばんとて衝濤館に泊る。渚を洗ふ浪の音、絶間なく、休憩なき波の不安心は、つかれたる旅人にはふさはしからず、夏ならば胸を衝く濤もこそと思はれぬ。（十二月二十五日、明石にて）



論語抄解（一）

井箆節三

巻之一、學而第一。

子の曰はく、學びて時に之を習ふ、亦悦はしからずや。朋ありて遠方より來る。亦樂しからずや。人知らざれども慍らず、亦君子ならずや。

「爲政第二」に「吾、十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に從へども矩を踰えず」とあるを參考すべし。

學びて時に之を習ふとは、年少適宜の時期に於て學問修養に志すの謂、朋遠方より來るとは、成學德行の君子相往來して互に其蘊蓄を發揮し經綸を實行するの謂、人知らざれども慍らずとは、常に名利の上に超然として敢えて物質有形の得失利害に依つて自他の人格品位を上下判斷せざるの謂にあらずや。

果して然らば君子當に世に處し道に志すの指南方針

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

として誠に適切の語、「論語」開巻第一の章句たるに恥ぢずと謂ふべし。但し此一章を以て直ちに「論語」全巻の根本となし孔子教理の神髄となすが如きは如何にやと思はる。

有子曰はく、其爲人や孝悌にして而して上を犯す（が如き）者は鮮し矣。上を犯すを好まずして而して亂を作す（が如き）者は未だ之れあらざる也。君子は本を務む。本立てば道生ず。孝悌なる者はそれ仁をなすの本か。

先づ社會を改めて而して個人を救はんか。はた先づ個人を改めて而して社會を救はんか。短見者流往々前説を採ると雖、孔子は與せず。基督も宣へり、盲は盲の案内をなすべからず、汝等兄弟の眼にある塵を取る前に先づ汝等が眼にある梁を取れと。

子曰はく、言を巧みにし、色を令る者に、仁なるは鮮し矣。

仁愛は至道也、至純也、無我也、自然也。故に敢えて改飾を要せず、敢えて之を改飾するは眞の仁愛にあらざる也。愛は誇らず、驕らず、非禮を行はず、己の利を求めず。（コリント前書第十五章）

曾子曰く、吾日に三たび吾身を省みる。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習はざるを傳ふるか。

唯だ深切なる勿れ、彼を愛せよ。「自己」を忘れ我全力を彼に捧げよ。彼が最幸を謀れよ。臨機應變的なる勿れ。平生準備修養して十分彼が最幸を謀り得るやう我知能人格を訓錬し置け。「爾曹の主いづれの時來るかを知らざれば怠らずして守れ。爾曹之を知れ、家の主人、盗人の何時來るか知らば其家を守りて破らすまじ。然れば爾曹も預備せよ、思はざる時人の子來らんとすれば也」云々。馬太傳第二十四章第三十二節以下第二十五章を參照すべし。

朋友に對しては斷えて秘密を藏むなかれ。

不確實の事實を輕々しく口外する勿れ。何如に些細の小事と雖、之を十分に明知するには自ら多少の研究觀察を要す。未だ之を研究考慮せずして漫りに之を口

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

外するは大なる罪也。「爾曹ただ然り〳〵、否な〳〵と言へ。之より過ぐるは悪より出づる也。」（馬太傳第五章第三十七節）

子曰はく、弟子入りては孝に、出でゝは弟に、謹みて信じ、汎く衆を愛して仁に親づき、行に餘力あらば以て之を學ぶべし。

文は古の載籍さては詩書六藝の文にして、即ち高尚なる趣味を謂ふ。徒らに四角四面の道徳家となる勿れ、餘裕を以て宜しく高尚なる趣味をも涵養せよと也。

子曰はく、君子重しからざれば威あらず。學は固るなかれ。忠信を主とせよ。己に如かざる者を友とする勿れ。過ちては改たむるに憚る勿れ。

五個各別の教訓也。己に如かざる者を友とする勿れとは、自己以上の者とのみ交際せよとの謂にはあらず。友とするは私淑する也。大に我が私淑する所の者を選べと也。

子禽子貢に問うて曰く、夫子の是（諸）の邦に至り給ふや、必ず其政を聞かれ給ふ。（かくも夫子が重んぜられ給ふ所以のものは自ら）求め給ひしか。抑も（他より）與へられ給へるか、と。子貢が曰く、夫子は温良恭謙讓を以て之を得給へり。夫子の之を求め給ふや、それ人の之を求むるとは異なるならんか、と。

「誠に實に我爾曹に告げん。子は父の行ふ事を見て行ふの外は何事をも行ふこと能はず。蓋すべて父の行ふ事を子も亦行へば也。」（約翰傳第五章第十九節）

「イエス答へて曰ひけるは、我もし自ら榮をなさば我榮は虚し。我を榮る者は我父即ち爾曹か我神と稱ふる所の者也。」（約翰傳第九章第五十四節）

有子曰はく、禮の用は和を貴しとなし、先王の道を斯れ美となし、小大之に由る。（もし先王の道に於て未だ）行はざる所のことあらば、和を知つて和すべし。（先王の道由るべきなき新事は）禮を以て之を節ふるにあらざれば亦た行ふべからず。

禮の要は形式の嚴美にあらずして精神の調和にあり。古來の慣習は概ね此調和の宜しきを得たるものな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れば、努めて之に據するを可とす。もし夫れ新事に至りては宜しく其精神の存する所を考へて禮儀に適せしむべき也。

子曰はく、君子は、食は飽くを求むるなく、居は安きを求むる無かれ。事には敏くして言には愼み、有道（の士）に就きて（己の不完全を）正すべし。（かくてこそ）學を好むと謂ふべけれ。

「爾曹何を食ひ何を飮み何を衣んと思ひ煩ふなかれ」。「狐は穴あり、空の鳥は巢あり、然れど人の子は枕する所なし」「旅資に何をも携へざれ、杖又は旅嚢、粮、金錢、二つの衣をも帶ぶる勿れ。」「もし我に從はんと思はゞ己を棄て十字架を負ひて我に從へ。」

子曰はく、人の己を知らざるを患ひず、（己の）人を知らざるを患ふ。

「爾を神に歸せよ。」「爾曹何事も人に事うるが如くにせず、主に事うる如く心より之を行ふべし。」（コロサイ書第三章第廿三節）

小倉百人一首解釋

辻村靖子

おきなとを竈と解し、潟を無みを片男波とかくほどならずとも、年の始のかるた會に、淸濁を誤り吟じ、物狂はし打ち興じながら、歌のよしあし、意味の一わたりも辨へぬは、口惜しかるべし。さればかうもやあるべきと思へるを、小倉百人一首のうちより約二十首解しにくきと誤りやすきとをのみぬきて解釋す。猶杜選のことも多かるべし。背に汗あゆることにこそ。

天智天皇

秋の田の、かりほの庵の苫をあらみ、わが衣手は露にぬれつゝ、

天皇御身を推しくだし土民になりて辛苦をよませたまへるなり。然るに風詠此の時代のにあらず。萬葉十に「秋の田にかりいほつくり吾居れば、衣手寒く露置きにける、」とあり。若此うたをよみあやまれるにはあらずや。

持統天皇

春すぎて、夏きにけらし。白砂の、衣ほすてふ天のかく山。

香久山は大和十市郡なり。藤原宮より近く見やれば、山かたつきて夏衣あまた干せるか見るにより、時節に感じて詠ませ給へるなり。こも本歌には西向「衣ほしたり」とあり。衣ほすてふは衣ほすといふなれば、ふつに聞えぬなり。されどもとの歌を知り、歌の意味を辨へ、さて俗に從ひて大らかに誦むかよし。「衣ほしたり」など〻我は顏に改めては中々嗚呼なるべし。

山邊赤人

田子の浦にうち出て〻みれば、白妙のふしのたかねに雪はなりつ〻

こも原の歌は、「田子の浦ゆ、うちいて〻みれば、ましろにぞ、富士の高根に雪ぞ降りける、」とあり。田子の浦より打出て見ると、薩陀の山かけにて見えさりし富士の雪が眞白に見ゆる、理や衣手寒しと思ひしにと、驚嘆の意味にし「ける」とは結びたり。「白妙のふじ」とは續かず。「又なりつ〻」と云ふ理なし。

安倍仲麻呂

天の原、ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。

百人一首は古人も云へりし如く、必しも瑕なき美玉をのみ選びと〻のへられたるにあらねば、よく味ひて善きはよく悪しきはあしと識別するばかりの眼光なくてあるべからず。此うたの如き眞情流露、千歳の下人をして泣かしむるは、得やすからざる名吟と謂ふべし。古今集の詞書に、「仲麻呂を唐に物習はせに遣したりけるに、あまた年を經て得歸りまうでざりけるを、此國より又使まかり至りけるにたぐひて、まうで來なんとて出でたりけるに、明州といふ所の海邊にて、彼の國の人馬のはなむけしけり。夜になりて月いと面白くさし出でたりけるを見てよめるとなむ、語り傳ふる、」とあり。天渺々とははてなきところ、ふりさかりて是れは、あのさやけき月かげは、我故郷の春日にてある三笠の山にさし出したる其月かと、遥かに故鄕を思慕ひ

たる、限なく哀なり。已に明州浦を漕出てしを、颶風に遇ひて安南に漂着し、そこより直に唐に歸る。遂に本土に歸らずして歿せしなり。

參議篁

わたの原、八十島かけて漕ぎ出てぬと人にはつげよ、海士のつりふね。

是も亦すくれたる調なり。傳にいふ、承和五年、唐使の五船海に泛ふ。大使藤原常嗣の乘るべき第一の船損じたるに、篁の第二の船を常嗣のとし、第一の損じたるを篁乘るべしと詔あり。篁恨みて申す、「篁家貧しく親老いて自も亦病多し。水を汲み薪を採り匹夫の孝を致さん」とて、辭して敢て船にのらず。よりて違敕の罪にあたり、廢して庶人とし、隱岐國に流さる。行くべもしらぬ海の上に數多き島をさしてこきいでしといふことを、ふりすてかたかりし思ひ。人にことつてくれよとなり。違敕の身つゝましさに一片の海士小舟に託して纒綿の情をよせたる、あはれことに深し。

在原業平朝臣

ちはやふる神代もきかず、たつたかは、からくれなゐに水くゝるとは。

ちはやふるは神の枕詞なり。神代には種々新異にして思ひえさることもありといへど、其神代にも未だきかず、唐紅の美しきいろに、藍色の流るゝ水をくゝりぞめにすといふことは、となり。くゝりぞめとは纐纈とて、絹を絲にて所々くゝり、紅、紫、綠、何いろにも染む、今の角しぼり、緋鹿子のごとき染かたか。古今の詞書に「二條の后の春宮の御息所ときこえけるときに、御屛風に立田川に紅葉流したるかたを書けりけるを題にて詠める」、とあり。書畫を題にしてよめるなり。

元良親王

わびぬればいまはたおなじ。なにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ。

後選集戀の五に出づ。詞書に「事いできて後、京極の御息所につかはしける」とあり。京極の御息所とは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時平の女褒子を云ふ。一首の意は、事既にこゝに至りぬ、とてもかくて名のたちたるを、たとへ身は亡ふとも猶あはましと、切なる情を述べられたり。みをつくしは澪漂ともかき、海の深淺を知るべきため棹をたて置くものなり。

菅家

このたびはぬさもとりあへず手向山、もみぢのにしき神のまにまに。

古今集覊旅部にあり。詞書に「朱雀院奈良におはしましける時、手向山にてよめる」とあり。御幸の供奉のさわがしさに、私のぬさはさゝげ奉らぬと、幸此山のもみぢのにしきさながらに手向にしまつれば、神の御心のまにまにとらせるまへとなり。

三條右大臣

名にしおはゝあふさかやの、さねかつら、ひとにしられて、くるよしもかな。

逢坂、さね、くる、皆縁語なり其名のやうならば、さねかづら(蔓草)草の滋みのいづてより繰るも、見えわかぬやうに、人に知られず我心にまかするよしもかな、となり、されば人に知られてにあらず知られでなり。

貞信公

小倉山、峰のもみぢば、心あらば、いまひとたびのみゆきまたなむ。

拾遺集にみゆ。詞書に「御かどの御供に、大井川につかうまつりたまへるに、紅葉小倉山に色々のいと面白かりけるを、(帝)かぎりなく愛でさせたまひて、行幸もあらむにいとゞ與あるぬべき所となむありける。(貞信公)奏して行幸を、せさせ奉らむと申給ふついでに」とあり。此詞かきにて、歌の心分明なるべし。御幸は已になりぬ、とてもの譽に紅葉も散らで、行幸を待ちつけよとなり。

凡河内躬恒

心あてに、折らばやをらむ、初霜の、おきまとはせる、しらきくのはな。

心あてに折るならをりもしやう、いづれか菊いづれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か霜ともわかぬなり、されど、花に心をしめたれば、其心より推しはかりて、をりはそこないしとなり。

紀友則

久かたの光のとけき、はるのひに、しつ心なく花のちるらむ

久かたの春の日遲々として、空も霞の、鳥の聲も、のどかなるに、花はなに故に、心のどかならず、いそがしくちるぞとなり。春の日にのつぎに「何として」といれてみるべし。」

紀貫之

人はいさ、心も知らず、ふるさとは、いなそむかしの、かににほひける。

詞書に「初瀬に詣づることに、宿りける人の家に、久しく宿らて、程へて後にいたりければ、かの家の主人「かくさだかになむ、やどりはある」と云ひいたしはべりければ、そこにたてりける、梅の花を折りてよめる、と云ふのなれば人はさあどうあらうか、花はむかしの香に匂うてさいてをるか、と云ふなり。いざ

と濁るべからずいさと淸みてよむべし。

平兼盛

忍ふれど、いろにいでにけり、我戀は、ものやおもふと、人のとふまで。

壬生忠見

戀すてふ、我が名はまたき、立にけり、ひとしれずこそ思ひそめしか。

此二首、同じ意にて、いづれとも分ちがたき秀逸なれば判者小野宮殿、打案じておはしけるに、主上御微音に、兼盛の歌を吟じたまへば、さては天氣左にありとて、兼盛のかちとなりとし、天德歌合記にあり。忠見夫より不食の病つきて、死にけりとは沙石集にみゆれど、信を措き難し。

紫式部

めぐりあひて、見しや夫とも、わかぬまに。雲がくれにし。夜半の月かな。

詞がきに「早くより、わらは友達にはかりける人の、年ころへて行合たる、ほのかにて、七月十日ごろ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の、月にきほひてかへり侍りければ」とあり歌の意、説明を要せず。

赤染衛門

やすらはで、ねなましものを、さよふけて、かたぶくまでの、月をみしかな。

後拾遺戀部にいづ。詞書に「中關白、少將にいへりけるとき、姉妹なる人に、通ひて物云ひわたり侍りけり。たのめて、來さりけるつとめて、女にかはりてよめるとあり。

伊勢

いにしへの、ならの都の、八重さくら、けふこのへに、にほひぬるかな。

一條院の御時、奈良の八重櫻を人の奉りたるを、御前に侍りければ、其花をたまはりて歌よめと仰られければよめる、となり。

清少納言

夜をこめて、とりのそらねは、はかるとも、よにあふさかの、せきはゆるさし。

大納言言行成卿物語なとしけるに、内の御物忌にこもるとて、急ぎ歸りて、つとめて、鳥の聲に催されてと云をこせてはべりければ、夜にかゝりけるとりの聲は、函谷關の事にやと云ひつかはしたりけるを、是は逢坂のせきにてそと云ひはべりければ、つかしける。とあり平安朝時代の宮嬪が如何に才識の優れしか當意即妙機智に富みたりしが、此三四首にも想ひみるべし。

三條院

心にも、あらでうきよに、ながらへは、こひしかるへき。よはの月かな。

後拾遺雜へ入る。詞かきに「不豫に例ならずおはしまして、位などさらむと、思召しけるころ、月のあかゝりけるを御覽じて」とあり。違例故、御位をさらむと思召すに、若思はすに、御命もながらへさせたまいし、此禁中の月いかばかり、慕しく思召しいたされむとなり。

祐子内親王家紀伊

おとにきく、たかしのはまの、あだ波は、かけしや袖の、ぬれもこそすれ。

ひく手あまたのあだ人にはなひかじとには袖ぬらすやうなる悔をするか厭はしけれはの意なれはかけじやなりかけしやとす淸むべからず。

鎌倉右大臣

世の中は、常にもがもな、なぎさこぐ、あまの小舟の、つなてかなしも。

萬葉三に「世の中を、なにゝたとへむ、朝ひらき、こぎいにし、舟のあとなきがこと。」とあること渚こぐ海士の小舟の憐むべき見渡しを世の中常なるものならば幾度も來てあくまでもみまほしきものと、絶景に對して、人世を觀したる歌なり。

前大僧正慈鎭

おほけなく、うきよの民に、おふかな、わがたつそまに、よみぞめの袖。

大氣なくは大膽になり。何の德なく戒律なき身にて大膽に天が下の人民に、我墨染の袖を覆ふかとなり。

我立杣とは、傳敎大師の一乘止觀院、今の中堂建立のとき「あのくたらさんみやく三菩提の佛たち、我立杣に、冥加あらせたまへ。」と詠みたるより、叡山の名となれるなり。作者天台の座主となり、主上の寶祚長久、萬民の安康豐樂ならむことを、六時中護持するかまことに身にも、應せすとよめり。

後鳥羽院

人もをし、人もうらめし、あぢきなく、よを思ふ故にものおもふ身は。

順德院

もゝしきや、ふるきのきはの、忍ふにも、猶あまりある、むかしなりけり。

王室の式微武門(鎌倉幕府)拔扈の世のさまを述懷せさせたまへる御製なり。前者は人も愛し、人も恨しと當世を、憤りなけきおはしまし。後者は軒ばにしける忍草しのふにあまる昔なりと悲しませたまへる打誦しまつるにたえず。承久の亂のもとすゑ思ひ合はすべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことに優れたりとおほしき歌

朝ぼらけ、ありあけの月と、みるまでに、よしのゝさとに、ふれるしら雪。

木も草もあまりには埋れぬ、朝の雪目にみるやうなり。

村雨の、露もまたひぬ、まきの葉に、きりたちのほる、秋の夕くれ。

深山の晩秋誦するにあたり打しめる心地す。よしとも思ひわかれぬ歌

吹からに。秋の草木の、しをるれば、うへ山かせを、あらしといふらむ。

わかいほは、都のたつみ、しかそすむ、よをうち山と、人はいふなり。

うかりける、人をはつせの、山おろし、はけしかれとは、祈らぬものを。

瀧の音は、たえて久しく、なりぬれと、なこそなかれて、なほきこえけれ。

ああ、我家の燕

猪野隼夫

ああ、我家のつばくらめ。
冬は來るとも、温き
巣はあるものを、いと豊に
餌はあるものを。旅鳥の
義理には堅き、つばくらめ、
同じ族種の鳥なれば、
野の旅鳥とうち群れて、
南に往きぬ。

ああ、わが家のつばくらめ。
野こえ、山こえ、海を越え、
行へは遠き、亞刺比亞の
砂漠のほとり。案内する
ものしなければ、或時は
行くてに迷ひ、恐ろしき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

島に、怪鳥の醜瓜に
裂かれもせずや。

ああ、我家のつばくらめ。
舟も、車も、糧もなく、
たのむは小さき翼二つ。
又或時は、端しなき
海路の旅に、日を數多、
疲れし頃を、暴風雨して、
妻子を抱きて、大海底に
沈みもせずや。

ああ、わが家のつばくらめ。
春にしなれば、青柳の
風に舞ひつゝ、戯れつつ、
憂かりし旅もうち忘れ、
いとも輕快の挨拶や、
雛、雀など、打見舞ふ、
心やさしき、つばくらめ。
春ぞ待たるゝ。

麴町の秋

塚田たか子

渇ききつた櫻の落葉をふんで友と千鳥が淵に別れる歸り路只一人ほつ〳〵と包かた手に三宅坂を左へと行く自分。話し相手をなくした淋しさに、急にさむさを覺えて、今朝羽織を着て來なかつたのをつふやく。

どんよりとつめたそうに曇りた空に只つた一つ北へとんで行く鳥を眺めながら、無意識に兩の足をすゝませてゆく。

突然「ハイ御免よ」と云ふ車夫の大きな聲におどろいて、道を左によける。後から遠慮なく吹きすさぶ冷い風が大路の砂を高く吹きたゝせて車の後を追ふ。ばら〳〵つと面に音して目つぶしを喰はされていやな風とかこちながらやがてしはだゝいた眼を見張るとさきの車に田舍のお婆あさんらしいのをのせた老車夫が四五間さきのやゝうすらいだ砂烟りの中をはふ樣に走つて居る賃借らしい車の後には黒ずんだ饅頭笠がかゝつ

て居る。

秋も深くなつた事よと考へなから行く事二十歩餘り忽ち左手壕に沿ふて歩み行く四十格好の窮措大に目がつく何んだか見覺えのある人よとよく〳〵考へて見ると先日來判檢事試驗當時毎日司法省の門から出て來た人だつたとやう〳〵に思ひ出す。うすよごれた羽織袴にへりきつた薩摩下駄をすあしにひゞが生て片手に辨當箱らしいのをもちかた手はふところ手と云ふかたにはまつたいてたちこの様子ぢやあ先日の試驗も不結果に終つたのかしらと考へると妙に氣の毒になつて來て夕ぐれの風が一入重く身にしむ

ちり〳〵に大ちゞれた壕端の柳の葉にさつと凩が渡るさもつめたそうにさゞ波の立つお壕の水にはつきりところがれた柳の影がうつて一もと〳〵と遠ちの木がうすれて居る。さび色をした芝生の土手のみきわにいつ歸つて來たか鴨が二三羽うゐて居る。

壕端三町麹 町の秋もふかしや。

古文新香（其の一）

嵯峨菫子

源信内供横川に於て涅槃經を供養する物語

今は昔、比叡山の横川の源信僧都の、内供にてありける時に、横川の諸の道心を發せる聖人達と同心にして、涅槃經を書寫し奉る。各一巻づゝ之を書く。然るに西塔の實因僧都この事を聞きて、これ貴き功徳なり、結縁の爲に我も書き奉らんと云ひて書くを、西塔の人皆聞き繼ぎて書けり。しかるに東塔の四つの谷並に無動寺まで聞き繼ぎて書きければ、既に十五部になり給ひぬ。劣らし負けじと競ひ書きたる程に、各眼も耀やくはかりいみじく貴く書き奉りけり。既に供養の日になりて、各横川に持ち集りたる員極めて多し。經をは經机共に居ゑ並べ奉りて僧共の前に皆置きたり。時も吉き程になりぬるに、西塔の實因僧都經共を具し奉りて同院の人共七八十人はかり率ゐて渡れり。

されば諸の人思はく、今日の講師は此僧都の勤め給ふべきなりけりと思ひ合はするに、如何にもなくて居固まりて時も移る程に、寳内僧都源信内供に曰はく、今は疾くこそ始め給ひてめ、何ぞ遅くなること。内供の云はく、實に久しく罷り成りぬ、疾く禮拜に登らしめ給ふべきなりと。僧都の云はく、おのれ今日の講師仕らんこと更にあるべきことにあらず、御房のつとめ給ふべき也と。内供の曰く、おのれ何でか仕らん、極めて見苦しきことなるべし、只御房ぞ疾く登らしめ給ふべきなりと。僧都の曰はく、さらば今日の御供に候ふべからぬ事なり。何に仰せらると云ふも更に爲すべからず、倘仰せられは西塔に罷り歸りなむと。かくの如く互に讓る間に日も漸く傾きぬれば、内供かく仰せられんことを強ちに申し返さむも極めて辱く覺ゆ。また人々の限りなき道心を發し給へるに今日を延べんも不便なるべし。然れば無形の如く申し上げんと云ひて、立ちて寄るを見れば、布衣の太つかなるを着て、下には紙衣を着たり。袈裟などにも布の太つかなるを着たり、見るに極めて貴し。昔の大迦葉もかく樣の姿にやありけんと推し量らる。

かくて禮盤に登りてまづ見廻して、佛の御方に向ひて、貴く振ひたる音を以て曰はく、涅槃經は生々世々にも聞き奉ること難し。今日の結緣は昔の深き契によりてなり。大衆諸共に深く此の事を信じてまづ同時に禮拜し給へといひて立ちて禮拜す。内供袖を以て顏を蔽ひて音を放ちて泣き給ふ。大衆皆一時に音を放ちて泣く聲、昔の沙羅林の人の泣きけんもかくこそはありけめと貴く悲しく推し量らる。皆泣入りて暫しばかりありてなん講師泣く〱涙に噎せながら、形の如く申し上げ給ける。

事畢りて僧都西塔に歸りて房にして云はれるけやう、おのれ講師せましに、佛に物申すことなどか爲さらん。但し若干の人を一度に涙を落して泣かしむることはあるべきことにあらず、是は内供の極めたる聖にまします德によりて泣かしめ給ふなり。今日の結緣の功德によりて我身三悪道に墜ちじと思ふが極めて貴く

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

悲しきなりと云ひてぞ泣き給ひしと。小野の座主といふ人の聞きて語るを聞き繼ぎてなん、語り傳へけるとかや。（今昔物語）

「今昔物語は源隆國の著はす所と傳へらる。全べて三十卷、印度、支那、並に日本の諸話傳說を集錄す。東京神田冨山房發行名著文庫第五卷に「今昔物語選」あり、價廿錢。文學博士藤岡作太郎氏校訂。

さて藤岡博士の說に從へば、「今昔物語」は文學的作品としては餘り價値あるにあらず、むしろ粗笨無雜の謗を免がれずと雖も、著者當時の事實を見聞のまゝに飾らず記せるより自ら平安朝の寫眞として當時の風俗人情を觀るに便なり。右の一章、源信内供と賢因僧都が性格もよく描かれたり。教訓としても佳き話なりと謂ふべし。妾幼き頃祖母の常に物語れる話極めて多く此書に見出さる。天保以前には廣く讀まれたるにや。

罪（小說）

師岡聖

工學博士中田德之助の長男潔が勢よく玄關の書生部屋に飛込んで、ピッシャリ襖を閉めた。

「お早う御座います。」

と、書生は丁寧に挨拶して、火鉢の傍へ座蒲團を置く。潔は別に返事もせず、片手を懷中したまゝあぐらをかく。顔は洗つたけれどもまだ眼が醒めぬといふ顔付。

「兄さん、お早う。」

書生の膝に右手の臂をついて裁縫の眞似をして居た仲の妹が勢よく叫んで、一寸横目をつかふ。潔は横柄に

「ああ、」

とばかり、輕く貧乏搖をして、

「君、貰はないのか」

「ありません。」

「さざみは。」

「可けないと仰有るわ。」
「だつて兄さんは幾歳だと思ふ、廿一歳だよ。」
「あらお正月が來なくちや廿一歳ぢやないわ。」
「お正月だつてもう一週間ぢやないか。」
「だつて」
「それなら可いよ、敏さんには賴まないから。桃さんは良い孃だね。」
「およしなさいよ。桃さんなんか可愛想ぢやありませんか。」
と、此時まで、書生部屋の左の隅の小机で、しきりに鵞堂の習字をして居た上の妹の八千代子が、氣の弱い末の妹の桃子を庇ふべく口を出した。
「良いぢやないか。千代さんなんか餘計な事を云はないて、默つて勉强なさい。落第なんかしない樣に」
「憚りさま。落第なんかしませんから。兄さんぢやあるまいし。」
「僕が何時落第したい。ヘン千代さんこそ高等女子學校の競爭試驗に落第したから、已むを得ず女子大學に
「粉ばかり。」
と書生は淋しく苦笑する。
「財政困難の形かね大に公債を募集し給へ。」
「何でも同じでしてね。」
「ハヽヽ。敏さん、後生だからお父さん許へ行つて敷島一つ取つて來ておくれ。」
「今裁縫の御稽古してますもの。」
「可いぢやないか、一寸行つてお出でよ。」
「だつて、」
「チエ、何だそんなサルマタなんか。」
「いやだ。サルマタぢやなくてよ。臺所着よ。」
「誕かけかい、およしよ、それよりか柔順に兄さんの御用をなさい。」
「厭よ、妾盜人なんか。」
「何か盜人だい。」
「だつて盜人よ、お父さんの莨なんか持つて來るなんて。キット叱られるわ。」
「斷はれば可いぢやないか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行つたんぢやないか。」
「兄さんだつて今に御覧なさい。甘く高等學校に入學が叶ひましたらだ。」
「そりや、女學校なんかと高等學校とは、てんで違はね。それにあなたが落第なんかゝて見せるから可けないのよ。」
「何ゝ眞似をなさいとは申しませんわ。」
「うるさいね。ね、桃さん、あなたは柔順だね。」
桃子は怨めしさうに、うつむいて、睫の長い眼で兄の顔色をソッと窺つた。
「ね、千代さんは落第で、敏さんは末席から何番だらう。桃さんだけは何時でも一番で最優等でせう。」
桃子は泣きさうになつて、ツト起つて部屋を出た。やがてソッと五寸ばかり襖を開けて、
「兄さん、ハイ。」
と敷島を一袋出した。潔は猿臂を延ばして受取つた。
「どうも有がたう。お入り。」
と、兄は愛想を放つたが、桃子は直に襖を閉ぢて行つてしまつた。（おはり）

白菊

高宮安夫

鹽釜街道に白菊植えて、
何を待つ〳〵、便り待つ。

鹽釜へは尙ほ一里半。並木の半ばは散つて、執念深く殘るものは赤や褐や黄に彩られ、紅いのは二月の花よりも赤い。織りなす錦は春にも劣らず、悠々とした蒼い空と、昭々とした濶い野に調和して、床しく懐かしいこと又限りない。天は蒼く、地は黄なる、其直中にたゝ一つ、銀杏返しに赤い根がけ、紅い襟、紅い帶、紅い裾を高う掲げた乙女の姿。其口より漏れ來る歌のこえ。

鹽釜街道に白菊植えて、
何を待つ〳〵、便待つ。

と、細く珊瑚を碎く一雨の曲。風に靡くさゝがにの糸輕く響き來る音に、余は其俗ならぬ畫のやうな光景に唯だぽつとなつた。此俗謠何か由緒のあるやうて、感

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

興に任せ、茶店の老媼より聞き得た次第は次の一條。

昔、瓢釜長者とて其近界に名高かりし家。或時は御殿へも用達せし程であつたが、それも長者三代の例に漏れず、續く災難に今の悲境。老母一人眼鏡越の猫背姿て、日當りよき緣側にて、夜寒を凌ぐつゝりもの。時々側なる一鉢の白菊に眼をくれて、ためつすがめつする樣の常ならず、時々は膝にも上せて育む老の心のいたはしさ。軒端の雀かしましく、色づける葉一葉白菊をちらせぬ。日もやゝ西に傾きし時、門に訪れし村夫子。老婆はためつすかしつ、澁茶をすゝめつゝ語り出でける物語。

まあよう聞いてくださつしやい。眼もあてられぬ今の冷落。二代の昔はこれでも、あゝもういふまい、老の愚痴。

いやもう年寄つたものは何うともなる。たゞ忰が嫁がいとをしい。五六年前はまだ少しは餘る財産もあつた故、花々しく咲いて嫁入つた。が、先代の借金とて何處からも彼處からも、嫁の荷までも持出され、(家は破れて風寒く、一陣ぱつと立つ姿。)五年の春、只一通の遺書で嫁の姿は見えなくなつた。さあ世間の風評。やれ愛憎つかしだの、何だのと、姦しく云ひ立てられ面目ないやら悲しいやら、果は嫁の不身持てと、愚痴もこぼした。思へば罪深いことでした。

老媼は涙をおさへつ。

ところが二三日も四五日も立つての後、江戸よりと云つて飛脚が來て、此方が問ふ間もなく一包のものを渡して逃ぐるが如く立去つた。忰と二人不思議やら恐ろしさに包を解けば又一重、白菊よりと記してある。白菊とは聞かぬ名と、尚ほ恐る〳〵打開けば、金五十兩に添へた嫁が手紙、之にて家を興して呉れよ。あゝ悲しいやら有がたいやら、さりながら喩へ一緒に死なうとも、こんなことはさせられぬと、忰は直ぐに江戸に向ふ。それと思ふ所を三日三夜尋ねたれど、何の手懸もあらばこそ、多分は入水したとのこと。われも入水と心は決めたが、老いたる母にひかされて忰は空しく歸つて來た。それより忰は一生懸命、妻が志に報

いんと、朝に暮に馬子働き、朝早ければ人が見ぬ。夕晩れば人が見ぬ。あゝ可哀想に、若いものどもどうか許してくれよ。

村夫子も思はず涙に誘はるゝ。日は黄昏て、たゞほの白き菊一輪。

せめては嫁が形見にと、嫁は菊、菊は嫁、菊の花のよい日は嫁の心も健な日と、陰膳すえて念じて居る。日は全く暮れて、村夫子は去りつ。白菊の花輕く搖れて、馬子の歌を鈴の音、遠くいと哀れに聞こゆ。

これは過ぎし昔の物語「鹽釜街道に白菊植えて」の由緒だと、茶屋の老婆も何となく此姿に似て、我も遠い昔に涙をこぼした　余は幾度となく振り返りつ、鹽釜を立ち出づれば、立田の姫の織りなせる錦も前とは趣を變へ、黄に散れる木の葉を分けて歩み來る人一人馬一匹、これではないか打見れば「鹽釜街道に白菊植えて。」彼は無心にうたひ行く。

新書管見

讀書生

（一）ベエコン論説集。

高橋五郎氏譯註、東京神田雉子町東洋社發行。定價金壹圓貳拾錢、クロース洋裝四六版。

フランシス、ベエコンは一千五百六十一年に、エリサベス女皇の掌爾官の子として倫敦に生れ、佛蘭西に遊學し、後父の訃音に接して歸朝し、一時貧困に處して風雲を待ちしが、後ジエムス一世の位に即くや、拔んでられて大辭院長の顯職に登り、子爵を授けられ、同時に碩學の譽を天下に轟かせり。然るに後收賄の罪に座して獄に投せらるゝに至り、不遇の間に死せり。享年六十五。高橋氏ベエコンを評して曰く、「古來ベエコンほど深く人生を知れる者は鮮し。ベエコンは實に人生の浮沈盛衰、榮辱、得失を達觀せり。否、啻に達觀したるのみならず又身躬ら之を經驗せり。遺臭流芳兩つながら絶倫なる、是れ此人の偉大なる所以とす。」云々。世人往々にしてセエクスピアを以てベエコンの變

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

名なりとなす、亦一理なきにあらず。本書收むる所の論文五十餘編、法律に、文學に、哲學に、其識見の卓絶せる眞に驚くべし。諸般の問題に對する所論一として適切圓滿を極めざるはなし。高橋氏の翻譯は稍直譯に過ぎたりと雖も、其註解は流石に博識なる高橋氏を辱かしめず。ベエコンの紹介者として高橋氏は最も適任者といふべし。

ベエコンの文章は一篇として適切圓滿なるのみならず、又文辭頗る簡潔にして句々金言にあらさるはなし。今各篇につき一二句を抄萃せん。

吾人が虛僞を喜ぶ所以のものは、啻に眞理を發見するの困難にして勞苦の多大なるに由るに非ず、又眞理か其一たび發見せらるゝや人心を拘束するか爲のみにはあらず、亦是れ吾人に虛僞其物を愛する一種奇怪の天性あるに由る。（第一眞理を論ず）

吾人の死を懼るゝこと恰かも小兒が暗中を懼るゝが如し。蓋し死は生の自然なると同じく自然也。故に赤子にとりては生るゝことは死ぬると同じく苦しからん。（第一、死を論ず）

宗敎は人間社會結合の連鎖なるか故に、其が一致の連鎖内に十分結束せられたる時を以て尤も幸福なるものとす。（第三、宗敎を論ず）

復讐をなす者は自ら仇敵と同等ならしむる也。復讐をなさゝる者は仇敵以上に超然たる也。（第四、復讎を論ず）

良馨は焚かれて尤も香しきか如く、道德は逆運に處して尤も美し。（第五、逆運を論ず）

高貴の人は自ら幸福の者と思ふには他人の贊成を待たざるべからず。（第六、高地位を論ず）

人心は往々自然の現象に滿足して自然の支配者を忘る。（第七、無神說を論ず）

迷信は不信よりも惡し。是れ神を凌辱する所以なれば也。（第八、迷信を論ず）

幸運は猶ほ市場の如し。人若し少しく待たば物價屢低落すべし。（第九、遲疑を論ず）

新事物は外客の如し。歎美せらるゝは大なれども、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愛顧せらるゝは少し。(第十二、新法を論ず)

世には嚴肅に兒戲して自ら得々たる者多し。(第十三、似智を論ず)

友誼に相反せる二個の結果を生ず。即ち歡喜を二倍し、悲哀を折半す。(第十四、交友を論ず)

猜疑は蝙蝠に似たり。常に暗中を飛翔す。(第十七猜疑を論ず)

他人に當る談話を避くべし。談話は須らく野原の如くなるべし、何人の身家にも歸着すべからず。(第十八談話を論ず)

富の德に於けるは猶ほ輜重の軍隊に於けるか如し。是れ固より廢すべからずと雖も、其進行を阻碍するや甚し。(第十九、富を論ず)

之を譬ふるに、幸運を招致するの道は天に位する銀河の如し。是群小星の衆合なれども、其等の小星たるや箇々にしてて看取すべからず、只合して光輝を與ふるのみ。斯の如く人をして幸運ならしむるにも亦殆んど目に留まらぬが如き幾多の功德在るありて之を然らしむるものといふべし。(第廿一幸運を論ず

人は人世を飲むこと愈大なれは、醉ふことも亦愈大也。(第廿二、青年と老年とを論ず)

名聲は川の如し。輕くして膨脹せるものをば泛べ、重くして堅實なるものをば沈む。(第廿三、稱讚を論ず)

忿怒の最良の治術は時間の猶豫にあり。(第廿五、忿怒を論ず)

虛僞は最も淺薄なる政略也。(第廿七、虛僞を論ず)

妻は青年の情婦たり、中年の伴侶たり、老年の看護たり。(第廿九結婚を論ず)

一切の行爲は過度に失することあり、唯愛は過度に失することなし。(第三十三、仁愛を論ず)

禮儀を重んぜんには唯だ之を蔑視せざれば足れり。蓋し吾人の擧動は衣服の如し、狹隘嚴密に過ぐれば運動歩行を不自由ならしむ。(第五十五、禮儀を論ず)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白羊宮

太陽が毎年一週する軌道を黄道といふ。太陽が黄道を一週するや、其通路に當つて所謂十二宮の星座あり。黄道の左右に一條の連帶をなして相並列す。故に又た之を黄道の列宿ともいふ。白羊宮、金羊宮雙女宮、巨蟹宮、處女宮、天秤宮、天蝎宮、人馬宮、摩羯宮、寶瓶宮、雙魚宮、これ也。それ太陽は諸天十方の王者なれば、「神は彼處に太陽の爲に帷幄を設け給へり。彼は新郎が祝殿を出づるが如く、勇士が競走を悦ぶに似たり。其の運り行くや天の極に至り、物として其の和煦を蒙らざるはなし。」「詩篇第十九篇」太陽を大神に擬ふべくば、十二宮の星座は十二の天使にも譬へつべし。太陽を基督に比ぶべくば、星座は十二の使徒にも倣へつべし。中にも、純潔と柔和と威嚴と平和との象徵なるは、わが白羊宮なり。之を今號に題す。

編輯餘言

井箆節三

本誌の編輯につき御心づきの節々は、良きにつけ、あしきにつけ、御遠慮なく御心添へ被下度、特に會員諸姉に御願申上候。

文章、詩歌、種類を問はず、形式に拘はらず、何なりとも隨時御投稿被下度、努めて掲載いたすべく候。

マルチヌス、ルウテルが異郷より故郷の乳母に預けたる愛子に贈れる手柬。近世的教育法の開祖にして幼稚園の鼻祖とも稱へらるゝペスタロッチが村の少年少女に與へし痛切なる教訓の手柬。獨逸近世の溫和詩人クラウデウスが臨終の病床より幼き我子に與へし手柬。此等は次號の紙上に掲載いたすべく候。

御寄稿は東京市麴町區土手三番町十五番地日本基督教女子青年會内小生宛に御願申候。以上。(一月七日)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN

OF

JAPAN

Vol. VI. *January, 1909.* *No. 1.*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vice-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members	Non-Resident Members
Miss A. B. West	Miss K. Tristram, Osaka
Dr. Tomo Inouye	Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Miss Hama Hirano	
Mrs. Hana Ibuka	
Mrs. Koharu Nakajima	
Miss Uta Suzuki	

Miss A. Caroline Macdonald,

General Secretary

Headquarters:— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,

Tokyo

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治四十二年一月十五日發

YOUNG WOMEN
OF
JAPAN

Vol VI. *January, 1909.* *No. 1.*

CONTENTS

Topics for Devotional Meetings.
Some Passages from my Diary. .... Kotosei.
Random Thoughts. .... S. Kinoshita.
On the Homeward Way. .... A. Hyodo.
Comments on selected Passages from
Confucius' Analects. .... S. Ino.
Notes on the Hyakuninisshu. .... Y. Tsujimura.
To the Swallow (A Poem). .... H. Ino.
Kojimachi in the Autumn. .... T. Tsukada.
Sin (A Story). .... S. Murooka.
The White Chrysanthemum. .... Y. Takamiya.
A New Interpretation of old Literature. .... T. Saga.
New Books Reviewed.

東京神田美土代町三秀舍印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA